

令和8年3月21日(土)

お早う御座居ます。神藤評議員会議長の開会挨拶にありましたが、人生の半分は私の話を聞いてきたとのお話で、長いお付き合いだと感じています。

私自身、普段から自分より一回り程年上の方々とお話することを意識しています。そうした方々と接する中で、私がいつも気にしているのは健康状態です。自分より少し先を歩んでいる方々が、どのように健康を維持しておられるのかを知るとはとても参考になりますので、お会いする度に健康状態について伺うようにしています。

神藤さんもこれから10年ほど経てば、大きく変わっておられるだろうと思います。常に学び続けることが脳の活性化に繋がりますし、学びとは生涯続くものです。学び方も時代や自分自身の考え方によって大きく変わっていく筈です。そのようなお気持ちでお互い共に学び続けていければ良いなと思います。

私も来年80代に入りますが、最近良い本だなと思い繰り返し読んでいるのが、伊與田覺先生が亡くなられる少し前にお書きになった『百歳の論語』です。この本を読むと、ほのぼのとした感じを受けます。論語について細かく解説するというより、まるでそよ風が吹くように自然と心へ入ってくる、そんな論語の世界が描かれているように思います。

以前にもお話しましたが、私が伊與田先生と初めてお会いしたときのことが印象に残っています。

先生は冒頭のご挨拶で、「私は論語を90年間学び続けておりますが、あなた様は何年学んでおられますか」とおっしゃいました。私はとっさに頭の中で、自分が論語を学び始めたのは18歳の頃だったなと思い返ししながら、「私は浅学でございまして、論語を学び始めてまだ50年しか経っておりません」とお伝えし、やり取りをした記憶があります。

いくつになっても、学びは学びですが、その学び方は年齢とともに変わっていくものだと思います。

論語素読に参ります。本日は平和の「和」を意識し3つの章句を選びました。まず私が読み上げますので、皆様も続いてご唱和をお願い致します。

(全員で素読)

① 子<sup>し</sup>曰<sup>いわ</sup>く、君子<sup>くんし</sup>は和<sup>わ</sup>して同<sup>どう</sup>ぜず。小人<sup>しょうじん</sup>は同<sup>どう</sup>じて和<sup>わ</sup>せず。(子路第十三・23)

私は昨日の高市早苗首相とトランプ大統領のやり取りを思い浮かべました。②の「丘や聞く、国を有ち家を有つ者」という部分についても、両者のやり取りを例に考えると理解しやすいように思います。

「君子は和して同ぜず」

相手と話をする時、単に話を合わせるのではなく、心から理解し合おうとする姿勢を意味しています。

「小人は同じて和せず」

一方こちらは、表面上は相手に同調しているように見えても、心の底では本当に理解し合っている訳ではありません。

昨日の高市総理とトランプ大統領の会談ですが、上辺だけの同調はお互い懸命に行っていました。高市総理の行動はハグというのでしょうか。ハグとは本来、互いが自然に抱き合うものだと思いますが、昨日の様子では高市総理の方から積極的に抱きついていったように見えました。会いたかった気持ちをトランプ大統領に強く伝えようとしたのだと思いますが、それは表面的な同調だと感じます。

互いに相手を褒め称えながら、ジョークだと言いつつ真珠湾の話を持ち出すやり取りを見ていると、同調しながらも牽制し合っている印象を受けました。

日本の官僚側は、今回は言質を取られなくて良かったと感じているのではないのでしょうか。あれをやります、これをやりますといった具体的な約束をさせられることなく、何とか乗り切ることが出来てよかった、という受け止め方をしているようです。

ただ、お互い苦しいやり取りだったのではないかと感じます。同調の仕方を見ていると、池波正太郎が描いた「人間というもの」に通じるものを感じました。人間というのは、良い事ばかりしている人でも、どこかで悪い事をしている場合がある。逆に、悪い事ばかりしている人でも、どこかで良い事をしているものだと言

ます。

そういう人間の複雑さを考えると、互いに褒め称えながら、足元では相手の足を蹴っている、そんな印象も受けました。

今回の日米同盟は、形としてこの関係を成功させなければならない、良いムードで進めなければならない状況下でしたので、トランプ大統領も腹の中にあるものを全て表に出すことなく、ある程度抑えながら話を進めたのではないか。私はそのような印象を受けました。

日米同盟のやり取りを見ていて、私は今書いている西郷隆盛のことを思い出しました。西郷隆盛という人物は、世の中に素晴らしい人物として伝わっています。西郷隆盛が偉大な人物として後世に残った背景には、勝海舟という存在が大きかったと思います。

勝海舟は「西郷は素晴らしい」と世間に向けて何度も語り続け、様々な形で書き残しました。その勝海舟の言動によって、西郷隆盛の人物像が後世に伝えられていった面があるでしょう。

もう一つ大きなものとして、『南洲翁遺訓』があります。これは当時の庄内藩の方々が西郷隆盛の言葉や考えをまとめ、後世に残したものです。これもまた、西郷隆盛という人物を後世に伝える上で大きな役割を果たしました。

「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」

話は論語に戻りますが、君子とは、お互いを認め合った時には、心から一致することが出来るのだと思います。

日本語に「肝胆相照らす」という言葉があります。互いに心の奥底まで理解し合う、そういう関係を表す言葉です。西郷隆盛の一生を振り返りますと、まさに肝胆相照らすような人物との出会いがありました。その一人が、水戸の藤田東湖です。

西郷隆盛は、藤田東湖先生は素晴らしい人物だという想いで会いに行きました。どこまで正確な話かは分かりませんが、当時まだ若かった西郷隆盛は、藤田東湖の話に一所懸命、耳を傾けていたと言われています。そして帰り道では、まるで山賊の親分のような風貌の人だがすごい人だ、と何度も口にしながら歩いていたそうです。

それほどまでに藤田東湖に感銘を受けた西郷隆盛に対して、藤田東湖もまた、西郷隆盛という人物の大きさを感じたようです。

その次に、肝胆相照らす間柄であったと思われるのが、橋本左内との関係です。先ほどお話した藤田東湖は容貌魁偉と評されるような人物でしたので、西郷隆盛も会った瞬間に圧倒され、素晴らしい人物だと感じたようです。

ところが、橋本左内の場合は少し違いました。橋本左内は小柄で、優男に見える人物でした。その為、西郷隆盛も最初に会った時は見た目の印象から、この人物はそれほどでもないだろうと考え、やや軽んじていたようです。

しかし、話を聞き始めると状況は変わりました。じっくりと対話を重ねるうちに、西郷隆盛の態度は次第に変化し、この人は素晴らしい人物だと認めるようになります。そして、互いを認め合う関係になっていきました。

橋本左内も、最初の頃は西郷隆盛についてそれほど高い評価を書き残していませんが、時間が経つにつれて、両者は肝胆相照らす間柄になっていったのではないかと感じます。

その事を示す逸話も残されています。西郷隆盛は西南戦争の際、橋本左内から受け取った手紙を懐に入れ、大切に持ち続けていたと伝えられています。それだけ橋本左内を特別な存在として敬愛していたのでしょう。

また、勝海舟との関係も肝胆相照らすものだったといえます。勝海舟と初めて会った際、西郷隆盛は勝の語る壮大な構想や見識に大きな衝撃を受けたといわれています。

当時西郷の心中には、常に大きな存在として島津成彬がいました。島津斉彬は、西郷が師と仰ぐ人物というよりも、西郷の才能を見だし、その力を認めて世に送り出してくれた恩人でした。

島津斉彬の側近たちは、「今日は斉彬様が西郷を呼んで話をしているな」とすぐに分かったそうです。もちろん、側近たちは同じ部屋にはおらず、外で控えていました。それでも分かった理由は、斉彬がキセルを灰吹きに打ちつける音にありました。

普通の家臣から報告を受ける時には、「そうか、そうか」と軽くキセルを打っていました。しかし、西郷隆盛が報告する時には、「そうか、よし」と力強くキセルを打つ音が響いたといいます。その音の違いを聞くだけで、側近たちは、今日は西郷が呼ばれていると分かったと伝えられています。

島津斉彬は、親交のある他藩の大名たちに対して、最近宝物を手に入れた。将来必ず世の中で大きく活躍する人物を家臣の中から見つけた、と誇らしげに語っていたと言われていました。その人物こそ、当時は西郷吉之助と名乗っていた西郷隆盛でした。

少し話はそれますが、西郷隆盛の名前にはこんな逸話も残っています。天皇陛下から褒美を賜ることになった際、役人は通称の西郷吉之助ではなく、正式な名前を確認しようとしてしました。しかし、西郷本人は函館へ向かう船の上にいて、すぐには確認できませんでした。

幼なじみの吉井友実に尋ねたところ、彼は考えた結果、正式な名前は隆盛だったと思うと答えました。役人はそのまま「西郷隆盛」として手続きを行い、褒賞もその名前で記録されました。

後にそのことを知った西郷は、そのまま「西郷隆盛」を正式な名前として用いるようになったと伝えられています。本人の意思とは関係なく名前が定まり、それを甘んじて受け入れたという逸話です。

また、西郷隆盛の弟・西郷従道にも似たような逸話があります。西郷隆盛と西郷従道の兄弟は、勘違いや聞き間違いによって名前が変わりましたが、それを受け入れ、生涯その名を使いました。

和して同ぜず、あまり細かいことに気にしないというのが含まれていると思いました。自分の名前を人が間違えたら、普通訂正しそうなものですが、この兄弟はそれならその名前でもよかよか、と気にせず受け入れています。

このように細かな事に拘らない人柄だったからこそ、西郷隆盛には肝胆相照らす人物が次々と現れたのでしょう。その一人が、庄内藩の中老・菅実秀です。庄内藩は戊辰戦争後、西郷隆盛の寛大な処置によって救われた為、西郷を恩人として深く敬っていました。藩主をはじめ多くの藩士が九州を訪ね、西郷から教えを受け、その言葉を熱心に書き留めました。

その記録は、孔子の教えが弟子たちによって『論語』としてまとめられたように、菅実秀の呼びかけによって大切に残されました。

その後、西南戦争が起こると、明治政府は庄内藩が西郷に呼応して挙兵することを警戒し、厳しく監視していました。実際、藩内には挙兵を求める声もありましたが、菅実秀はそれを必死に抑えます。西郷さんは本気で天下を取ろうとして戦っているのではないと見抜いていたからです。本気で立った戦いであれば庄内藩も行動

したでしょう。そうではないと判断したので、庄内藩は挙兵せず、代わりに西郷の教えを資料として残しました。

西郷隆盛が「賊軍」の汚名を着せられた後、朝廷によってその名誉が回復されると、菅実秀は、今こそ西郷隆盛がどのような人物だったのかを広く伝えるべきだと考えました。

菅実秀は、庄内藩士たちが西郷から直接聞いて書き留めていた教えを集めさせ、一冊の書物として纏めました。それが『南洲翁遺訓』です。完成した『南洲翁遺訓』は行脚で全国へ配られ、多くの人々に西郷隆盛の思想や人柄を伝える役割を果たしたと言われてしています。

菅実秀は、臥牛（がぎゅう）の号を持っておりました。西郷隆盛とは、心の魂の交わりをした肝胆相照らす間柄として知られています。菅実秀は西郷を兄のように慕い、西郷もまた菅実秀を弟のように信頼していたと伝えられています。

もう一人、西郷が義兄弟の契りを結んだ人物が土持政照です。土持政照は、沖永良部島へ流罪となった西郷隆盛の世話を献身的に行いました。衰弱して命も危ぶまれるほどだった西郷を支え、健康を取り戻せるよう力を尽くしたのです。その恩に深く感謝した西郷は、土持政照と義兄弟の契りを結びました。

土持政照は、どうしてそこまで献身を尽くしたのか気になったので調べたところ、もう一つ興味深い縁がありました。妻は、大久保利道の父が島流しの際に島で授かった娘で、大久保利道の異母妹にあたる人物でした。その為、土持政照は大久保利道とも親戚の関係にあったと伝えられています。

西郷隆盛が西南戦争で亡くなった後、土持政照の妻は、異母兄にあたる大久保利道を頼って子供達を連れ東京を訪れました。親戚として子供達の将来を助けてもらいたいと考えたのでしょう。

大久保利道は子供達の面倒を見ることはなく、妹も家政を担う立場として扱われた為、妹は大久保の対応にがっかりしたという逸話が残っています。

一方、西郷隆盛の妻・糸は、沖永良部島で愛加那との間に生まれた菊次郎と菊草を自ら引き取り、大切に育てました。菊次郎は後に京都市長となり、菊草は大山巖の弟・大山誠之助に嫁いています。

この二つの逸話を対比すると、家族への接し方や人との向き合い方に、それぞれ

の人物像が表れているようにも感じられます。

西郷隆盛の話が続きましたので、論語解説に戻りたいと思います。

② 丘<sup>きゅう</sup>や聞<sup>き</sup>く、国<sup>くに</sup>を有<sup>たも</sup>ち家<sup>いえ</sup>を有<sup>たも</sup>つ者<sup>もの</sup>は、寡<sup>すくな</sup>きを患<sup>うれ</sup>えずして均<sup>ひと</sup>しからざるを患<sup>うれ</sup>え、  
貧<sup>まず</sup>しきを患<sup>うれ</sup>えずして安<sup>やす</sup>からざるを患<sup>うれ</sup>うと。蓋<sup>けだ</sup>し均<sup>ひと</sup>しければ貧<sup>まず</sup>しきこと無<sup>な</sup>く、和<sup>やわら</sup>げ  
ば寡<sup>すくな</sup>きこと無<sup>な</sup>く、安<sup>やす</sup>ければ傾<sup>かたむ</sup>くこと無<sup>な</sup>し。夫<sup>そ</sup>れ是<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>し。（季氏第十六・1）

孔子は弟子たちに、私はこのように聞いていると語ります。この言葉は、孔子が70歳を過ぎた晩年の教えです。

「国を有ち家を有つ者は、寡きを患えずして均しからざるを患え」

国や組織を治める立場の人を指します。現代でいえば、国の指導者や組織のリーダーと考えれば良いでしょう。

家を有つ者は、少し小さい規模で考えます。自民党を有つ、位の見方で良いでしょう。

孔子は、国を治める者は人口が減ることや、財産が少ないことを過度に心配するのではなく、公平さが失われることを心配すべきだと説いています。

「貧しきを患えずして安からざるを患う」

貧しい人が増えてしまうことを患うのではなく、人々の心が安定しないことを心配するという意味です。人心が落ち着かず、社会全体が不安定になることこそ、心配すべき問題であると孔子は説いています。

「蓋し均しければ貧しきこと無く」

収入がある程度あれば、自分は貧しい貧しいと嘆く人は少なくなる、という意味です。

「和げば寡きこと無く、安ければ傾くこと無し。夫れ是の如し。」

人々が互いに調和し、穏やかな気持ちで暮らすことができれば、不満や争いは少なくなります。社会が安定していれば、国が大きく揺らぐこともありません。

孔子の時代で言えば、君主も家臣も互いに和らいだ関係でいることで、国は安定

します。例え国民が少なくなり、貧しい人が増える状況があったとしても、人々の心が安定していれば、国家としては安定していく。国家とは、このようなものです。という教えです。

国家を安定させる道が、この言葉の中に示されています。現代の指導者も、論語をそのように読みこなし、活かしていけば良いだろうと思います。

現代の日本とアメリカに当てはめて考えると、トランプ大統領は根本的なところで小人ではないかと思います。私は4月発行の『知足』に巻頭言として「時代は変わったⅡ」と題し、トランプ大統領はならず者になった、アメリカはならず者国家になった、と書きました。

このような内容を文章として残すことについては忠告を受けました。言葉は消えても文章は残る。中国で習近平氏を「ならず者」と書けば捕まるように、そのような文章は危険だから残さない方がよいと言われたのです。

しかし、自分の心に湧き上がる思いを抑えることはできません。「これからは、あらゆるものが変わってゆく」とも巻頭言に書きました。捕まるかもしれないと思いつつ執筆しましたので、どうぞ4月発行の『知足』巻頭言をご覧ください。

時間になりましたので、前半はここまでといたします。

(休憩)

最近夜中まで西郷隆盛の本執筆作業をしていますので、そのことで頭がいっぱいになり、食事中や移動中も西郷さんに関する本を読み耽っています。外出時には5冊位の関連本を持ち歩いています。

今日のフォーラムでもつい西郷さんの話ばかりになってしまい申し訳ありません。どうかご容赦いただけますと幸いです。

では後半は論語の解説から始めます。

③ 有子 曰く、礼の用は、和を 貴しと為す。先王の道、斯を美と為す。小大之に  
由れば、行 われざる 所 有り。和を知りて和すれども、礼を以て之を節せざれば、  
亦 行 わるべからざるなり。(学而第一・12)

「有子 曰く、礼の用は、和を貴しと為す」



有子が言われました。ここでいう「礼」とは、誰もが守らなければならないルールや規範のことです。大きなものから小さな決まりまで、人が生きていく上で守るべき道を、まとめて礼と呼んでいます。

「和」とは調和です。「和を貴しと為す」は、重要視することです。人と人の調和を何よりも重要なものとして考えなさい、という意味です。

「先王の道、斯を美と為す」

昔の優れた王たちも、このように礼を重んじ、調和を大切にすることは大変良い事だとしていました。

「小大之に由れば、行われざる所有り」

小さいことも大きいことも、全て礼に従って行おうとしても、実際にはなかなかその通りには出来ないという意味です。

決められたことをその通り行うことは大切ですが、全てを例外なく守りなさいと言われても、現実にはそれを完全に実践するのは難しいということを表しています。

「和を知りて和すれども、礼を以て之を節せざれば、亦行わるべからざるなり。」

調和を大切にし、お互いに歩み寄って物事を円満に進めようとしても、社会の規範や秩序、礼に基づいて適切に調整しなければ、うまく実現することはできないという意味です。

人との調和を図ることは大切ですが、調和だけを優先してしまうと、かえって秩序が失われることがあります。礼という基準によって物事を節度あるものにする必要があります。

一方で、礼やルールも時代の変化とともに見直されるものです。その時代や社会の状況をよく考え、ふさわしい形に折衷して運用していくことが求められます。

運転免許証の更新制度もその一例です。私も昨年、運転免許証を手続きに従って更新しましたが、更新期間が5年から3年に変わり、高齢者に対する認知機能検査など、新たな制度が導入されました。

マイナンバーカードと健康保険証の運用についても、当初示された期限が延長されるなど、制度の運用が変更される例が見られます。変更が繰り返されると、国民は戸惑いを感じるでしょう。

社会制度は時代に合わせて見直される必要があります。一方で、国が示した方針や約束には一貫性が求められます。社会の信頼を維持するためには、必要な見直しを行いながらも、制度の変更については十分な説明と納得を得られる運用が大切だと思います。

ルールを頻繁に変えることは望ましくありませんが、時代の変化に応じて、人々が受け入れられる範囲で少しずつ見直していくことは必要です。

その際に大切なのは、調和を基本とすることです。一つの考え方に偏ることなく、全体のバランスを大切にしながら物事を進めることが重要であると、有子は説明しています。

これを日米首脳会談に当てはめて考えると、双方が調和を意識して対応したことが分かります。

アメリカ側は、会談の場やもてなしに配慮し、日本との良好な関係を築こうとしました。日本側も、自国の法律や立場を踏まえながら、協力できることは最大限取り組むという姿勢を示しました。お互いが自国の利益を守りながらも、相手との調和を図るために駆け引きを重ね、時には腹の探り合いをしながら折り合いをつけていくことで、日米首脳会談は一定の成果を収めたと考えられます。論語でいう「和」の考え方の一例として捉えることができます。

現在の国際情勢を見ると、『知足』の巻頭言で、アメリカはならず者国家になったと書きました。締め切り直前になり「行き当たりばったり」という言葉を付け加えました。

ホルムズ海峡を巡る対応を見て、トランプ大統領の政策運営には、その場その場で対応しているような印象を受けた為です。巻頭言は締め切り直前まで内容を見直していますので、その点も意識して読んで戴ければと思います。

ホルムズ海峡をめぐる問題では、アメリカは対応に苦慮していると思います。日本はイランとの関係を維持しており、アメリカと共に軍事行動に参加しない限り、日本の船舶の通航は認める姿勢をイラン側は示しています。

こうした状況から、日本は国際社会の中で以前にも増して注目される存在になっていると感じます。日本の姿勢を明確に示す動きとして、これまで日本はスパイ天国と言われていましたが、スパイ防止法に関する対応で、高市首相が具体的な手を打ったことに注目しました。

先週、東京フォーラムでお話しした内容ですが、日本政府は国家情報会議と国家情報局の設置を閣議決定しました。これにより、情報の収集・分析を一元的に管理する体制を整え、スパイ防止に向けた体制づくりへの道筋ができたことになります。

日本から完全にスパイを排除することは現実的に難しいものの、自由に活動できる状況を抑制していくことが目的で、この取り組みは7月から始まります。

最近のニュースでは、フィリピンで中国系のスパイ活動が摘発されているという報道がありました。研究者募集などを装って人を集め、地政学やフィリピンの政治・安全保障に関する情報を提供させるなど、知らないうちにスパイ活動に関与させられていたケースが問題になっています。

フィリピン政府はこうした動きを警戒し、取り締まりを強化しており、現在かなり神経を尖らせている状況です。

日本でも情報管理の甘さが指摘されてきましたが、こうした機密情報の流出を防ぐための対策の一つとして、今回の制度整備が進められていると考えられます。

オーストラリアと連携してレアアースの権益を確保しようとする動きも始まっています。海外との協力関係を積極的に強化する政策が、高市首相のもとで進められていると感じています。

もう少し見ていきますと、高市総理が進めている政策について、私は『知足』の巻頭言で取り上げました。高市総理は積極的に政策を推し進めていますが、その結果として、インフレがさらに加速します。財政支出の拡大、ばらまき政策も増えていくと指摘しました。

実際、国家予算は122兆円と過去最大規模になりました。これは、大規模な財政支出を行うための資金供給を拡大する方針を示しているとも受け取れます。総理自身は意図的にインフレを進めようとしているわけではないかもしれませんが、結果としてインフレを促進する方向に進んでいます。

先ほどお話ししたフィリピンの件や、日本がスパイ天国と言われる問題に関連して、最近ではYouTubeでも様々な情報が発信されています。

中国政府側からは、高市首相は軍国主義者であり、日本が軍国主義国家へ進もうとしているのは、そのような人物が総理大臣になったからだ、という趣旨の情報が発信されています。

また、琉球は独立を望んでおり、その動きが加速しているといった情報も広がっ

ています。これらはいずれも事実ではなく、フェイクニュースです。それにもかかわらず、もっともらしい内容として拡散されているのが現状です。

私は、こうした状況も、高市総理がスパイ防止法の制定を目指そうと考える大きな理由の一つになっているのではないかと感じています。外国に関する話題は、このあたりで一区切りにしたいと思います。

#### 〈恒例の質問〉

ここからは、恒例の質問と今回のテーマの両方を進めていきます。まずは恒例の質問に参ります。早いもので、もう3月も後半になりました。

○今年良い日が続いておられる方

○嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方

○有難うと言いつけているし、有難うと言われ続けている方

○身体の手入ををよくやっていると思う方

今日も朝方、体の手入をしました。棒術は山崎先生にご指導いただき、普段よりも長くて重い棒を使いました。実際に持ってみると大きさと重さを実感し、良い鍛錬になりました。朝は自転車に乗り、強風でしたので立ちこぎをして体を動かししました。

○自分磨きをよくやっていると思う方

○昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

恒例の質問は以上です。

先日の中斎塾フォーラム東京には、山形県鶴岡市から廣嶋さんがお越し下さいました。東久留米の文化協会会長をしておられる比田井さんとのご縁でお招きした方で、『南洲翁遺訓』を全国に広める活動をされています。当日は前半の時間を使って『南洲翁遺訓』の背景についてお話したところ、大変喜んで戴きました。

『南洲翁遺訓』に関する3冊の本を皆さんに回覧したところ、その場で購入された方もおり、最も古い『南洲翁遺訓』は現在では入手が難しく、Amazonでも取り扱いが無いそうです。

現在は、西郷隆盛の本に関する活動に加え、理事会や評議員会もあり、忙しい日々が続いています。事務局の佐藤さんにもかなりの負担がかかってしまっていますが、新しく細川さんが入ったことに加え、以前は手作業で行っていたテープ起こしも AI による文字起こしが活用できるようになり、作業効率が大きく向上しました。時代の変化に合わせて、本の書き方も大きく変わりました。最近は私の執筆も一気に進んでいます。

来月末には出版社へ原稿を提出する予定の為、しばらくは夜遅くまで執筆が続きます。

### 〈令和 8 年を考える〉

「令和 8 年を考える」というテーマでお話しします。丙午（ひのえうま）については、これまでも何度か取り上げてきました。昭和 21 年 2 月 17 日の出来事についても、最近では実際に調べて下さる方が増えています。今は AI に質問すれば、質問の仕方次第で分かりやすい答えがすぐに返ってくる時代になりました。

新聞記事についても、ここで新聞を実際お見せするより、AI に質問して内容を整理してもらった方が分かりやすいと感じています。資料を参考にしながら、私が考えていることについてお話致します。

私が昭和 21 年 2 月 17 日の出来事について調べようと思ったのは、お金の問題を考える上で非常に重要な事例だからです。預金封鎖は 2 月 17 日前日の土曜日夕方にラジオで発表されました。前日に発表されたからといって、銀行は既に閉まっている為、預金を引き出すことはできません。翌日は日曜日で銀行がお休みですので、そのまま預金封鎖が実施され、お金を引き出せない状況になりました。

当時の状況を調べると、日本がいかに混乱した状態にあったかがよく分かります。もし、そのような状況下で大きな地震や津波が発生したらどうなるでしょうか。そのような事態も想定しながら、備蓄が大切だと呼びかけています。

数日前にある場所で備蓄について話をした際、備蓄していますと答える方は多かったものの、何日分備蓄をしていますかと尋ねると、答えに詰まる方が少なくありませんでした。

1 日分と答える方もいれば、多くても 3 日から 1 週間分という方がほとんどでした。さらに、ペットボトルの水は何本かと聞くと、具体的な本数を把握している方はほとんどいませんでした。

私自身も、1週間分の備蓄と言っている、実際にはどれくらい必要なのか正確には分かっていませんので、8月に実験を行うことにしました。

15日間、赤城に滞在し、電気・ガス・水道の元栓を閉めて生活してみます。通常の電気は使いません。しかし、スマートフォンの充電は必要になりますので、車から電源を取って対応する予定です。

この生活の中で、1リットルペットボトルの水をどれだけ消費したのか、缶詰をどれだけ食べたのか、ご飯はどれくらい必要だったのかを、5日ごとに区切って記録していくつもりです。1か月を通して、水や食料をどれだけ使ったのか全て記録し、詳しく検証したいと考えています。

電気が使えないので、電子レンジでご飯を温めることもできません。そのような状況で、どのような食事が現実的なのかも確認したいと思います。

非常に重要なのがトイレの問題です。災害時には食料や飲み水の備蓄ばかりが話題になりますが、熊本地震を現地で体験した妻も、食べ物や飲み物は1日2日なくても何とかは耐えられるけれど、トイレだけは待たないでと話していました。

水道が使えない場合は、流すための水も必要になります。飲料水を使うわけにはいきませんので、近くの湧き水をバケツで運び、1回流すのに何杯必要なのかといったことも実際に記録していく予定です。

電気・ガス・水道が全て使えない状況で15日間生活した内容を9月に報告致します。実際にどうだったのか、具体的なデータとともにお伝えしたいと思っておりますので、ご期待下さい。

皆さんも、可能であれば1日だけでも構いませんので、実際に体験してみることをお勧めします。私自身も、実際に体験したことをもとに、現実にはこうだったとお話できるようにしなければならぬ、その必要性を強く感じるようになりました。

以上で後半を終わります。皆さんもぜひ、ご自身でできる備えを一つでも実践していただければ幸いです。ここで本日は終了とします。有難う御座居ました。